

渡邊弘著「人間教育のすすめ」東洋館出版社 2016年4月1日刊を読む

## 人間教育のすすめ

1. (1) これからの子ども観に、子どもははじめからよいものでもわるいものでも白紙でもない。子どもたちの内部に、いわば、「よさに向かおう」とする潜在的な働きがあるという考え方があります。  
(2) ここでの「よさに向かおうという潜在的な働き」とは、「よい人間とは何か」「よい生き方とは何か」など、どこまでもよさを求めていくということです。いいかえれば、何がよいかを考え続けていくということです。  
(3) 学校などで、一見、よさなど求めているように表面的には見えない子どもでも、本質的にはそうした働きを備えていることを認めるということです。この子にはそうした働きがあり、あの子にはないということはないということです。
2. (1) よい人間(子供)という者は、はじめから存在するわけではなく、私たちは、むしろどこまでも「よい人間」とは何かを考え続けていく存在なのであり、「よさ」とは名称としての目的ということです。  
(2) たとえば「よい教師」というものが最初から実在として存在して決定されている、あるいは、誰かがそれを知っているということではなく、よい教師とは何かを考え続けていくことが重要であるわけです。
3. (1) 私たちは、よく「よい子」「わるい子」「普通の子」などと、子どもたちを分けて考え、そうしたものとして枠づけて扱う習慣が無意識のうちにありますが、はじめからよい子、わるい子などが存在するわけではないはずです。  
(2) 「教育」とは「子ども(人間)をよくしようとする」と定義します。

P59 ~ 60

### <コメント>

教育の本質に迫る、作新学院大学学長渡邊弘先生による本格的なご著書です。ぜひご一読ください。

2020年8月15日(土)